



Title	百寿者におけるSuccessful Aging：身体・認知・心理の包括的アプローチ
Author(s)	Zhang, Xinyu
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105377
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (Zhang Xinyu)

論文題名

百寿者におけるSuccessful Aging
：身体・認知・心理の包括的アプローチ

論文内容の要旨

本論文は、身体・認知・心理の三領域から百寿者の実態を総合的に検討し、超高齢期におけるSuccessful Aging（以下：SAとする）の新しい理解を提示することを目的とする。従来のSAは「病気の少なさ」「高機能」「社会参加」を重視するが、身体的フレイルや認知機能の低下が一般的となる百寿者には適用が難しい。本論文は、身体や認知の低下が進む中でも心理的ウェルビーイングが維持されるという現象を手がかりに、超高齢期に適した新しいSA理解を提示する。

研究Ⅰでは、2014～2022年の9年間における3つのコホートの比較を通して、百寿者の身体機能（BADL・移動能力）が後期コホートほど低下していることが明らかとなった。特に女性では重度介護を必要とする割合が増加しており、身体的自立の維持が困難であった。

研究Ⅱでは、認知症群の割合が新しいコホートほど上昇し、施設入所者で顕著であった。これらの結果は、医療・介護の進展や長寿化の進行により、従来であれば生存が難しかった虚弱な百寿者が増加しているという社会的背景を反映している。

一方、研究Ⅲでは、心理的ウェルビーイング（WHO-5）は身体機能とは関連せず、主観的健康感と認知機能が主要因であった。つまり、身体の弱さがそのまま主観的幸福を下げるわけではないという「disability paradox」が百寿者にも確認され、超高齢期の幸福の鍵は「どれだけ動けるか」よりも、「自分の状態をどのように理解し、意味づけるか」という内的・認知的側面にあることが示された。

研究Ⅳの質的統合は、この「機能低下と心理的安定の乖離」を解釈するための重要な視点を提供した。百寿者の語りには、現実を受け入れながら自分のペースで暮らしを整え、他者とのつながりを穏やかに維持する姿勢が一貫してみられた。本論文は、この生き方を「静かな能動性」と名づけた。静かな能動性とは、激しい挑戦や努力によるものではなく、心の在り方を整えつつ、できる範囲の小さな行動を積み重ねて生活を維持しようとする力である。これは、受容・関係・能動性の三次元を横断し、それらの相互作用を支える心理プロセスとして位置づけられる。従来のセカンドリー・コントロール、老年的超越と共通点を持ちながらも、生活的・関係的な実践を含む点でより広く、百寿者に特有の適応様式を表す概念である。

量的・質的知見を統合すると、百寿者のSAは、高機能の維持を成功とみなす従来モデルでは十分に捉えられず、衰えを前提としたうえでの心理的・关系的・存在的な適応として理解されるべきである。百寿者の幸福は、柔軟な受容、自律した日常の調整、家族や地域とのつながり、そして人生の肯定的意味づけによって支えられていた。身体や認知の機能水準そのものではなく、それらにどう向き合い、どう生きていくかという過程が幸福を形づくっていた。

本研究が提示する包括的Successful Agingモデルは、超高齢社会における老いの理解を大きく拡張するものである。量的データが示した「機能低下と心理的安定の乖離」を、静かな能動性という概念を通じて統合的に説明し、百寿者の豊かな生活世界を捉える新たな理論枠組みを提供した。これは、今後の老年学研究において、SAを固定的な成果ではなく、変化する状況に応じて生活を整え続ける「動的なプロセス」として捉え直す重要性を示唆している。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Z H A N G X I N Y U)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	権藤 恭之
	副 査	准教授	中川 威
	副 査	教授	綿村 英一郎

論文審査の結果の要旨

本論文は、超高齢期にある百寿者を対象に、身体機能、認知機能、および心理的ウェルビーイングの動態を統合的に検討し、百寿者におけるSuccessful Aging（以下、SA）の新たな理論的枠組みを提示した研究である。

本論文の学術的意義および独創性は、主として以下の4点に集約される。

第1は、百寿者を分析対象の中心とし、超高齢期における老化の実態を実証的に解明した点である。従来の老年学研究におけるSAモデルは、主に前期・後期高齢者を対象として発展してきた経緯があり、百寿者に関する実証的知見は依然として限定的であった。本論文は「京丹後百寿者研究」という希少性の高い疫学データを用い、身体的・認知的機能の低下が不可避となる超高齢期においても、心理的ウェルビーイングが維持され得ることを論証した。これは、老いの不可逆的な衰退プロセスにおける「心理的適応の多様性」を理解する上で、重要な実証的基盤を提示したと評価できる。

第2は、混合研究法（Mixed Methods）による包括的アプローチを採用し、多角的な知見を導出した点である。研究Ⅰから研究Ⅲでは、量的分析を通じて、身体・認知機能の変容と心理的要因の相関構造を統計学的に明示し、超高齢期特有の構成概念を抽出している。さらに研究Ⅳでは、質的分析を導入することで、定量的指標のみでは捕捉困難な、個人の語りに埋め込まれた心理的適応や意味づけのプロセスを精密に記述した。この多層的なアプローチにより、超高齢期の心理的安定が単一の決定要因によるものではなく、諸要素の動的な相互作用によって形成されることを説得力をもって示した。

第3は、既存のSA概念を批判的に再構築し、超高齢期の実態に即した理論的再解釈を試みた点である。本論文は、Rowe & Kahnらが提唱した従来のSAモデルが標榜する「高機能の維持」や「疾患の回避」という規範が、百寿者の実態とは必ずしも整合しないことを鋭く指摘した。その上で、身体的・認知的制約を抱えつつも主観的な適応感を維持するプロセスに焦点を当て、SAを「機能維持」という静的な状態から、「衰退を包摂した適応プロセス」へと再定義した。この理論的視座の転換は、老年学におけるパラダイムシフトに寄与するものである。

第4は、百寿者の適応機序を説明する中核的概念として「静かな能動性」を提唱し、統合モデルを構築した点である。本論文で定義された「静かな能動性」は、加齢に伴う不可避的な喪失を受容しつつも、日常の微細な工夫や他者との関係性を通じて主体的関与を継続する姿勢を概念化したものである。この概念は、超高齢期における心理的成熟やレジリエンスの本質を的確に捉えており、従来の「活動性」を重視する能動性概念を補完・拡張する理論的独創性を有している。

本論文の構成について：本論文は全6章から成る。第1章でSAに関する先行研究の批判的検討と課題設定を行い、第2章および第3章では量的データに基づき百寿者の身体・認知機能の特質を分析している。第4章では心理的ウェルビーイングの規定要因を検討し、第5章では質的研究の統合を通じて適応プロセスの構造化を図っている。最終第6章では、得られた知見を統合し、百寿者におけるSAモデルの理論的総括を行っている。

以上のとおり、本論文は百寿者の身体・認知・心理を統合する包括的な視点から、SA概念を理論的・実証的に発展させた優れた研究である。老年学および人間科学の発展に対する多大な貢献が認められる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと判定した。